

## ポストアーバン化時代の地方暮らし

轡田竜蔵（同志社大学）

## 1. 「移動する地域」の新しい公共性

『地方暮らしの幸福と若者』（轡田 2017）において、報告者は地方暮らしの若者のライフスタイルにおけるモビリティの重要性について指摘した。そして、特に地方の拠点都市から離れた条件不利地域での仕事や暮らしの質を考えるさいに、「居住地域」の枠だけで考えるのは不十分であり、それよりもはるかに広域的な「移動する地域」の枠組みが相対的に大きい意味を持つ点に注意を喚起した。「居住地域」の社会的求心力が都市インフラであるとしたら、「移動する地域」は情報インフラと交通インフラである。地域満足度は、居住地域の都市インフラの格差を強く反映するが、若者はモビリティによってこれをカバーするため、生活満足度をはじめとする人々の現状評価や社会意識については、「まち」と「いなか」の間には、現状では大きな格差は認められなくなっている。こうした状況について、報告者は「ポストアーバン化」とよんで注目している（轡田 2021）。ポストアーバン化の現実を踏まえて考えれば、例えば、地方は大都市に比べて家族規範が保守的で、寛容性に乏しいので女性の流出がとどまらないのだという説明の仕方も再検証が迫られる（轡田 2023）。

「移動する地域」の枠組みが重要になると、地方暮らしの若者の働き方・暮らし方の選択肢が広がる。特にコロナ禍以後、条件不利地域と地方の拠点都市、さらには大都市の二拠点・多拠点を結びつけた働き方のバリエーションが広がってきている。例えば、報告者がコロナ禍以降に主な調査フィールドとしている京都府北部は、地域企業の雇用の選択肢に乏しい条件不利地域であるが、IT 技術の発展と軌を一にして、ポストアーバンなライフスタイルやクリエイティブなローカルキャリアを魅力化する動きが多様に展開しており、これに呼応して多くの移住者が惹きつけられている現状がある。人口減少によって、既存の地縁組織に支えられた「古い」地域社会の構造に「隙間」が広がっているが、そこを突くように、社会的企業の特徴を備えたローカルベンチャーが次々にでき、外部地域とつながりを維持している UI ターンの移住者が中心になり、クリエイティブハブとしての機能を備えた「まちの居場所」も次々にできている。

これらは、「移動する地域」に対応した「新しい公共性」の形成の動きであると言える。本報告では、コロナ禍以後の京丹後市での調査データ（2023 年夏に行った質問紙調査、ならびにここ数年のインタビュー調査の結果）を紹介しつつ、こうしたポストアーバン化時代の「新しい公共性」に関わる若者の実態や意識について検討する。

## 2. 地方暮らしの未来像

日本の人口減少地域において、「新しい公共性」の生態系の広がりにおいて注目に値する動きが見られるホットスポットが増えている一方、こうした動きが全面化し、日本の既存の地域社会の構造が単純に塗り替えられていくとは考えにくい。大都市を中心とした日本型企業社会におけるライフキャリアに閉塞感を感じ、セカンドキャリアとして地方移住を選択した者が多いが、人口減少や人手不足が顕著な地域の雇用や暮らしの現実は厳しく、持続的なキャリアや安定した暮らしの未来を展望することができない者も少なくない。また、古い地域社会の生態系との間のせめぎ合いのなかで苦悩する者もいる。本報告では、こうした若者の具体的な事例を検証するとともに、地方暮らしの未来像を検討する。本シンポジウムの議論を通して、論点が深められることを期待したい。

## 参考文献

轡田竜蔵 2017 『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房

——2021 「ポストアーバン化時代の若者論へ」木村絵里子・轡田竜蔵・牧野智和編『場所から問う若者文化』晃洋書房

——2023 「家父長制と地方出身女性の選択肢」大貫恵佳他編『ガールズ・アーバン・スタディーズ』法律文化社

（キーワード：移動する地域、ポストアーバン化、新しい公共性）